



# すみだの風景 墨田区内の河川

## その5 消えた川・橋、名残りをとどめる古い川



1954年頃の曳舟川旧資生堂前（京島一丁目付近）

墨田区は水を活用し、その恩恵を十分に受けた反面、洪水など水の脅威と闘い続けてきました。本紙第9号から第16号までご紹介してきた川の他に、曳舟川のように「曳舟川通り」と街路名だけ残して姿を消した川、記録にだけ残る川や堀は少なくありません。しかし、綾瀬川や中川は「旧」をつけて、名残りを留めています。

消えた川の一つである曳舟川は古上水と呼ばれ、徳川幕府が本所開拓に伴う上水として、万治2年（1659）に開削したもので、俗に白堀上水とも呼ばれました。下埼玉郡瓦曾根溜井（現在の越谷市内）から分水して亀有・四つ木等を経て、小梅村から法恩寺橋まで白堀で達し、その先は地下に埋められた木桶で本所各地に配水し、深川方面等、ところによっては水船で配水しました。その後時代の変遷で、享保7年（1722）に上水としては廃止されたといわれています。しかし、川筋の脇を四ツ木街道が通り、それが水戸街道に接続していて人通りが多いので、今度は交通路として重要になりました。水深が浅く、流れがゆるやかなので、曳舟（往來の人や荷物を乗せ、肩に綱を付けて岸から引いた舟）が使われました。それも四つ木より上流の方で、区内に当たる所は幕末からのようです。やがて明治も中頃になると、人力車の発達によって、曳舟は消えていき、昭和29年から埋め立てられ、道路となりました。そして多くの

橋が架けられました。鶴土手橋などという優雅な名の橋もありました。この橋は曳舟川の近くですが、鶴が飛来する土手があつたことに由来する名称です。隅田川の両岸には荷揚げやし待ち等のための入堀が多くありました。例えば、木母寺あたりの梅若堀、現在の少年野球場の北側にあつた銅像堀等ですが、御竹蔵（横綱一丁目あたり）にも入堀があり、御蔵橋が隅田川岸近くに架かっていましたが、江戸絵図にも橋名が見えます。昭和54年に廃止された頃は、北越製紙の西側道路に川のない橋として残っており、この橋の近くに作家舟橋聖一の生家がありました。堅川と小名木川とを今の千歳橋のところで結んでいた六間堀も、途中で合流していた五間堀ともども、舗装道路になり、松井橋も弥勒寺橋（弥勒寺には杉山和一の墓がある）も姿を消しました。六間掘児童遊園が僅かにその名を伝えていきます。

綾瀬川は元荒川の支流といわれ、越谷方面に至る本流と分かれて西に平行し、草加をすぎ、葛飾区で中川と合流する全長48キロメートルの川です。江戸時代の頃は江戸と埼玉とを結ぶ重要な輸送路でした。しかし、荒川放水路（現在の荒川ができたので、その荒川に沿って流れる中川放水路に合流し、僅かに残った400メートルほどが墨田区の最北端を流れ、旧綾瀬川と呼ばれています）。

さて、中川は利根川と埼玉県羽生市付近で分かれ、江戸川の西側をほぼ平行に走って春日部を過ぎ、東京都の東部に入り、東京湾に注いでいました。なお、葛飾区に入る前は普通古利根川と呼ばれています。この川も荒川開削で下流が切断されてしまい、本流は荒川の東側を並流し、下流では荒川と合流しています。分断された旧中川は、東墨田三丁目に水門があり、江戸川区と墨田区・江東区の区境となつて、蛇行しながら南流しています。途中で堅川や小名木川とも通じ、最後は江戸川区小松川一丁目さきで、荒川と水門をはさんで再び通じています。この川に中平井橋と平井橋とが架けられています。中平井橋は昭和13年架橋と古く、平井橋は昭和55年架橋の新しい橋です。

参考 「橋はかたる」  
（墨田区教育委員会）  
昭和58年3月